

平成二十五年 度 入 学 試 験 国 語

京 華 女 子 中 学 校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※答えは解答用紙にはつきりと書きなさい。

まず、親の家を出てひとりで生きていくとはどういうことか、想像してみよう。
ひとりで生きるとは、ひとりでぼつんと立っていることではない。

家を探して「ここが私の住まい」と決め、その家を住みやすく整える。床の掃除をし、ガラスを磨き、いごこちのいい窓辺には自分の好きな椅子を置く。

朝、起きたら、雨戸を開けて布団をたたみ、朝ごはんを作って食べる。そうだ。前の日には、朝ごはんのための材料を買っておくことも、しなければいけない。牛乳、卵、パン、米、味噌。バターが切れたら買い足しておかないと、バターなしでトーストを食べなければならなくなる。

仕事に出かけるなら、家の戸締まりをして鍵を自分で閉めて出て行く。ゴミの収集日であれば、ゴミも出しておく。昼間のうちに、電話料金を支払ったり、買い物のお金を銀行で下ろしたりしておいたほうがいいだろう。

家への帰り道では、食いたいメニューを考えながら夕食の材料を買う。家に着いたら、おいしくなるように気合を入れて料理する。夕食がすんですぐにお風呂に入りたいなら、ころあいを見てバスタブにお湯を注ぎ込んでおかなければならない。

風呂あがりに清潔なバジャマを着るためには、洗濯だ。脱いだままほったらかしておかないで、時間があるときに――よくハれた日曜日にでも、洗濯機を回す。そして、干して、取り込んで、たたんで、たんすにしまう。

食事がすんだら、食器を洗って拭いて片づける。食器を洗っている最中に宅配便の人が来たら、玄関に行ってはんこを押して、二モツを受け取る。家にはあなたひとりなのだから、玄関のドアを開けるときは少し気をつけなくてはならない。

さて、風呂あがりには、楽しみに買っておいた好きなお茶とお菓子をつまんで、お気に入りの雑誌を読んでくつろぐ。夜もふけたら明かりを消して、太陽に干してふんわり気持ちよく膨らんだ布団に入って、ぐっすり眠る。

これが、ひとりで生きるということだ。

あなたたちのいつもの生活と、なにが違うのか。

いつもならお父さんやお母さんがしてくれる、いろいろな仕事――たとえば、食事の用意や買い物、生活するためのお金を銀行に行って出し入れることなどを、自分でしなければならない。つまりは、なくてはいけないことが増えて、たいへんになるだけではないか。

③ そう思うだろうか。

私なら、違うふうに考える。違うのは、自分で自分の暮らしを管理できることだ、と。

家を出てひとりで暮らしはじめると、自分の暮らしは自分のものになる。親の決めたことに従うのではなく、自分の決めたことに自分で従うことができる。これはもう、「従う」ということではない。⑤ 「自律」して生きるということだ。

することの内容は同じでも、捉え方が違うのが、わかるだろうか。

あなたには、⑥ こんな経験がないだろうか。自分で「今日は、お風呂掃除をしてピカピカにしちやおうかな」と思い立って、掃除をする。掃除をしているときには、すぐがんばれる。いつもなら見なかったことにする排水口の髪の毛、ちゃんと取っておきなくなる。そして、お母さんが気がついて、「あ、お掃除しておいてくれたの。助かったわ」と言ってくれたら、わくわくするくらい嬉しい。

でも、「今日は、お風呂掃除しようかな」と思いながらお湯につかっているとき、お母さんが「ちよっと、今日は掃除しておいてよ」と頼んできたら、いきなりやる気がなくなってしまふ。しようと思っていたのに、「だって、宿題もあるし」などとやらずに逃げたくなってしまう。強制的にさせられると、いかげんにすませて飛び出したくなる。

こんなふうに、同じ風呂掃除でも、言われてするのと、自発的にするのでは、がんばれる力も違うし、しているときの楽しさも違う。

ひとりで生きるときには、自発的にする楽しみがある。たいへんだけれども、自分が決めてしようとし、自分の力でしていくときには、親の家でしていたときはまったく違う充実感がある。

あなたたちのいつもの生活と違うのは、この「自分で決めて自分でする」かけがえのない充実感があるという点なのだ。

私は、「自分がたしかに生きていると感じられないなら、家を出る日のことを考えよう」と書いた。

家を出てひとりで生きるということは、自分で決めて自分で行う生活ができるようになることだ、とも書いた。

このことの意味を、よく考えてみよう。ここに、前に書いておいた「あなたのコンカンとなるもの」があることが、a できるだろうか。

私がそれを説明してしまう前に、ここで少し、私自身の経験を聞いてほしい。話したいことは、ふたつある。

ひとつは、あなたたちよりもっと小さなころの話。もうひとつは、もっと先、社会人になってからの話だ。

私は小学校に入る前から小児喘息しょうにぜんそくだった。走るとすぐにぜいぜいして、風邪かぜをひくと発作はつさで何日も寝込む私のことを、母はそれはb した。姉は丈夫じょうぶで活発な子だったので、母の心配は私にc した。発作が起きていないときは、元気なふうの子なのに。

掃除のときは「ほこりを吸うから、あつちに行つていなさい」と追いやられ、朝学校に行くときには「風邪をひくから、もう一枚着ていきなさい」とカーディガンを羽織はおられる。

走って帰って、ちよつと息が苦しくなつていても、自分ではがまんできるのに、母はめざとく見つけて「大丈夫なの。苦しいの」と聞いてくる。風邪が治つて「もう学校に行ける」と言うのに、母は「悪くなるといけないから、もう一日、休みなさい」と言う。自分の身体からだなのに、私が決めることはできなかった。心配する母の言うとおりにしないと、うるさくて仕方がない。だから、ついつい母の言うとおりにする癖くせがついていた。

そしてじつさい、そのほうが楽だった。

なぜなら、学校に行かなければ一日じゅう、好きな本を読んでいられるし、d はしなくてすむし、父の日曜ダイクのお手伝いなども、姉ばかりが呼ばれて私はなにもしなくてよかったし。しかも、アレルギー体質で洗剤せんざいを使うと湿疹しっしんが出るから、お皿洗いの手伝いなども、「あなたは、しなくていいから」とe されていた。

そんなラクチン生活をしていた私が、大きく変わったのは、小学校二年生のときだった。

【ア】K先生が、私の胸の音を聞いたり、顔を見たりしながら、母に喘息の状態についていろいろ尋ねているあいだ、私は黙だまって聞いていた。母は私のことをよくわかっている。母が、全部説明して決めてくれる……。

【イ】そのとき、やはりいつものように母が答えようとした。「この子は、注射はそれほど嫌いやがりませんが……」。すると、先生は「お母さんは黙だまっててください。渚なはちゃんに聞いているんですよ」とびしやりと言ったのだ。

【ウ】さっそく母が予約を取り、病院まで電車に乗って出かけた。診察室しんさつしつに呼ばれて、いつものように私は椅子に座り、母は傍かたわらに立っていた。

【エ】ひととおり診察が終わった後、先生は私に向かつて、「喘息を治すために、これからこういう治療をするけれど、注射はがまんですか。それから、月に何回か、来ることはできますか」と質問した。

【オ】そのきつかけは、当時、小児喘息の権威けんいと言われていたK先生だ。母が、同じ市内の病院に勤務されていることを、どこかで聞いてきたのだ。

そのときの気持ちを、私はいまでも鮮明せんめいに覚えている。ああ、私に聞いているんだ。私が自分で考えて、自分で決めて、この先生に話していいんだ！

そして、「注射はがまんです。学校は○曜日が四時間なので、来られます」と返事をし、「その注射は、こういうことのためにするんですよ」とわかるまで説明してもらった私は、心から自分に満足した。胸いっぱい深呼吸して、身体のすみずみまで新鮮な空気がいきわたったような、すがすがしい気持ちだった。

そのときはわからなかったけれど、私はそのときに、はじめてひとりの個人として扱あつかわれ、自分で考え自分の言葉で話してもいいのだよ、と教えてもらったのだった。

おおげさに聞こえるかもしれないが、私はそのとき、自分の身体を取り戻し、はじめて自分の言葉を得たのだと思っている。おもしろいことに、母は私になが起きたのかわかつていなかった。けれども、その後、何度もこんなことを言っていた。

「あなたは幼稚園ようちえんのころまでは、ほんとうにおとなしくて、女の子らしい子だった。でも、小学校に入ったところから独立心が出てきて、扱いにくくなったわ」

母にとって扱いやすいかわい**い**ばかりの子どもから、私は脱皮だっぴしたのだ。まだまだ半人前はんじんぜんだったけれど、精神的には、自分をことごとく守ろうとする存在である「母親」とケツベツfしたのだ、とも思う。

のちに、K先生はこのとき、「この子の喘息を治すには、まずは母親の干渉かんしょうから独立させなければ」と考えたことを知った。私は、喘息ちりょうの治療ちりょうの場を借りて、そのときの私に必要な言葉を与えられたのだと思っている。

〔辰巳渚『家を出る日のために』（イースト・プレス刊）による〕

問一

使わないものとします。

a

 $\sim$

e

に補う最適な二字の熟語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ語を二度以上

ア 心配
イ 免除
ウ 想像
エ 集中
オ 掃除

問二 【ア】と【オ】は順序が乱れています。論理的に正しい順序にならばかえて、記号で答えなさい。ただし、【ア】は三番目にくるものとします。

問三 線部①「気合を入れて」・⑦「めざとく」・⑧「ぴしやりと」の意味として最適なものをそれぞれ次の中から選び記号で答えなさい。

① 「気合を入れて」
 Ⅱ ア 精神を集中して
 エ 大声を出して
 オ 豪華ごうかな材料で
 ウ 体罰たいばつを加えて

⑦「めざとく」 Ⅱ

ア	たまたま目にして	イ	気をつかつて	ウ	見つけるのが早くて
エ	緊張感をもって	オ	厳しい様子で		

⑧ 「ぴしやりと」
 Ⅱ
 ア えらそうに
 エ 声を大きくして
 イ 不満そうに
 オ はつきりと
 ウ 心配して

問四 ———線部②「これが、ひとりで生きるといふことだ」とありますが、ここで著者が表現しようとしている内容として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いろいろな仕事を自分でしなければならぬということ。
イ 毎日同じような仕事をくり返さなければならぬということ。
ウ 日常的なこまごまとした仕事こそ重要であるということ。
エ 毎日たいへんでつまらない仕事がたくさんあるということ。
オ 毎日自分のやりたい楽しい仕事をたくさんできるということ。

問五
——線部③「そう」・④「違ふふう」の指示する内容として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ひとりで生きるのは、面倒なことをしなくてすむので、楽になることだ。

イ　ひとりで生きるのは、せねばならないことが増え、たいへんになることだ。

ウ　ひとりで生きるのは、自由になる時間が少なくなり、つまらないことだ。

エ　ひとりで生きるのは、ひとりではつんと立っているように、孤独なことだ。

オ　ひとりで生きるのは、自分で自分の暮らしを管理でき、充実感があることだ。

問六 ——— 線部⑤『自律』して生きる』とはどういうことですか。本文中から二十四字でぬき出し、最初と最後の五字を記しなさい。ただし、記号や句読点も一字と数えます。

問七 ——— 線部⑥「こんな経験」とは具体的にどんな経験ですか。「く」という経験」につながるように本文中から五十二字でぬき出し、最初と最後の五字を記しなさい。ただし、記号や句読点も一字と数えます。

問八 ——— 線部⑨「すがすがしい気持ちだった」とありますが、なぜ「私」はすがすがしい気持ちになったのですか。その理由として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の喘息がそれほどひどくないことを、先生の説明で理解できたから。
- イ 自分で考え自分の言葉で話してもいいと、先生に教えてもらったから。
- ウ 初対面の先生に対して、はずかしくない受け答えができたと思ったから。
- エ 両親以外の大人と話したことがなかったが、はじめて話しかけられたから。
- オ 注射の痛さをがまんできるか心配だったが、なんとかがまんできたから。

問九 ——— 線部⑩「そのときの私に必要なだった言葉」の内容を表す部分を本文中から二十字でぬき出しなさい。ただし、記号や句読点も一字と数えます。

問十 K先生はなぜ母ではなく「私」に直接話をしたのですか。その理由を四十字以内で答えなさい。ただし、記号や句読点も一字と数えます。

問十一 次の中から本文の内容にあうものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア お父さんやお母さんがしてくれる仕事は、親にまかせてしまった方が楽でよい。
- イ 「私」は掃除が好きなので、掃除をしているときはいつも、すごくがんばれる。
- ウ 自発的にお風呂掃除をしてお母さんに感謝されると、わくわくするくらい嬉しい。
- エ かけがえのない充実感をあじわうためには、ひとりで生きなければならぬ。
- オ 「私」は小児喘息であったため、小学校には十分に通うことができなかった。
- カ 「私」は小学校に行けるかどうか、自分の身体なのに自分で決められなかった。
- キ K先生は「私」に喘息の治療の話をして、ひとりで通院するように言った。
- ク 「私」は小学校に入ったところから独立心が出てきたため、母から嫌われた。

問十二 ——— 線部 a く f のカタカナをそれぞれ正確な漢字に直しなさい。

問十三 ——— 線部 ア く カ の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

